

甲状腺外科草子 21

華岡青洲の父

杉野 圭三

有吉佐和子の小説「華岡青洲の妻（1966）」は大ベストセラーとなり、テレビや映画でも大ヒットを記録した。麻酔薬「通仙散」の開発と嫁姑問題を絡めたストーリーである。

この中で、妻「加恵」と母「於継」の描写は詳細にわたるものの、父直道に関しては、「風采の上がらない容貌、衣装も見栄えせず、言動は粗野であり、於継の美貌に比較し不似合いである」と散々な評価をされている。

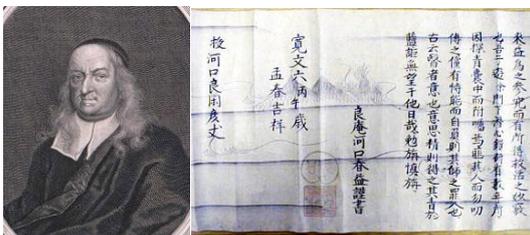


華岡青洲の妻（市川雷蔵、高峰秀子 1967）、参考文献

華岡家は南朝の楠氏の一族とされ、青洲の祖父、華岡尚政が初代隋賢と称し、現在の和歌山県紀の川市名出（平山の里）で医業を始めたとされる。青洲の父直道は二代隋賢、青洲（1760-1835）は三代隋賢と号した。

直道（1722-1785）は大阪で南蛮流外科の岩永磐玄に学んだとされるが、第二代の寿跡（1701-1749）が師ではないかとも推察されている。それ以外の業績や人となりについての記述は極めて少なく父や祖父が如何なる医師かは伝承も少なく不明瞭である。

青洲の医術は直道から受け継ぎその後、古医方を京都で吉益南涯に、カスパル流外科学を大和見立(1750-1827)に学んだ。



Caspar Schamberger、カスパル流免許状

ドイツ人、カスパル(Caspar Schamberger、1623- 1706) は、オランダ東インド会社の外科医として、1649年出島に到来し、西洋医学を伝えた。青洲の年代から考えると、外科学の基本はパレ（1510? - 1590）、シュルテス（1595 - 1645）、ハイスター（1683 - 1758）、カスパルがその源流であろう。



パレ全集（慶應大学所蔵）、Schultes 手術書 ハイステル手術書

オランダから伝わった外科学は紅夷外科宗伝、瘍医新書として翻訳され、それを基として青洲も勉強したものと想像する。



紅夷外科宗伝（1706） 瘍医新書（1790）

青洲が 15 歳の時、道で 30 両の財布を拾ったことがある。その時、青洲は道で立ち尽くし、落とし主が現れるのを待ち続けた。そして落とし主が現れるとお礼も受け取らず家に帰り父に報告した。そのとき父は「これで華岡家も安泰だ」と大喜びをした、という話が残っている。「この子にして、この親あり！」

父直道の人物評価は不明だが、親の教育がいかに優れていたかが窺われる逸話である。

画像は参考文献、Wikipedia などによる

参考文献

1. 上山英明。華岡青洲先生 その業績とひととなり。1999。
2. 和歌山市立博物館。華岡青洲の医塾 春林軒と合水堂。2012
3. 松木明知。華岡青洲研究の新展開。真興交易医書出版部、2013。

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2022年3月10日